

 「希望」だより	〒284-0005
	四街道市四街道 1-6-11 田中ビル 3F
	TEL & FAX 043-421-6645
	E-mail : kibou_donguri@ninus.ocn.ne.jp
	HP : http://kibou-donguri.org




謹賀新年



すばらしい「希望」のちょうど良いサイズ(^_^)

新年を迎えいかがお過ごしでしょうか？何事も自粛をしいられてきましたが、ワクチンも行き渡り、今年は「人とのつながり」が気兼ねなくできるようですのでそれを心待ちにしています。年の初めは初詣に行ってお願い事をしたり、「一年の計は元旦にあり」と新しい年の計画を立てるとか、頭の中が自分に向かうことが多い時期です。そんな時ふと、私は「ちょうど良いサイズっていいんじゃない！」という感じを思い起こしました。靴で言えばフィット感が一番大事ですよね。どんなに良いデザインでも素材でも高級でもサイズが合わなければ、靴擦れがしたりぶかぶかだったら歩けませんよね。身の回りのすべては、「ちょうど良いサイズ」が快適の原点だと思い至りました。

NPO法人希望のサイズ（規模）について考えました。市内の精神障害者を家族に持つ会の親たちが、家族たちへ安らかに過ごせる居場所を作りたいとの想いが出発点です。当初は、自宅を作業所にしたり空き地を農園にしたりとか手作りで、ささやかな居場所作りからスタートしました。現在では、NPO法人として「地域活動センター・どんぐり工房」＋「グループホーム・だんらん」へと発展してきました。世間では大きく立派な施設を備え、大勢のスタッフを抱える大規模福祉事業者があります。「希望」は設立以来人は替わりましたが、“障害のある利用者を家族のように支えたい”とのスタッフさんの“ぬくもりときめこまやかさと熱意”は、遺伝子のように続いています。一方でそれが発揮できるのは、“ちょうど良いサイズ”だからこそではないかとサイズの大事さを改めて悟りました。

(副理事長 猿橋芳生)

四街道市障害者基幹相談支援センター 令和4年4月開設へ

障害者総合支援法（略称）に基づく相談支援センターが、四街道市でもようやく開設されることになりました。センターの機能は、障害者に関する様々な相談窓口です。

本センター設置については、四街道市自立支援協議会で協議が行われています。当面は市直営で職員は3名配置されるとの説明がありました。詳しくは市の障害者支援課へ

地域活動支援センターどんぐり工房

どんぐり拾い🍄

【メンバーさんの感想】

どんぐり拾い、たくさん拾えて良かったです

(チャコさん)

少ししか拾えなかったけど、頑張りました (I LOVE CAR さん)

気温差が激しく、どんぐりが落ちてるかなあと思いましたがたくさん拾えて良かったです (J1 さん)



避難訓練🚂

地震！！火事！！

いざという時の為に備えて

避難訓練をしました

🍠 さつまいも掘り

たくさん収穫出来ました



イベント販売🇯🇵



当日販売を担当したメンバーさん、この日のために制作・製造に関わったメンバーさんも大変励みになりました。ご来場、そしてご購入頂きました多くの皆さま方、大変ありがとうございました。

クリスマス会🎄



👥メンバーさん、ボランティアさん、職員含め、多くの方が参加され楽しいひと時を過ごしました。「みんなと一緒にケーキを食べられて嬉しかったです」「お腹も心もいっぱいになりました」等々、感想をいただきました🍷

パラリンピックは障害者差別のイベント

どんぐり工房 利用者 大熊真春

新型コロナ対策で1年延期された東京パラリンピックが終わりました。ここで一つはっきりさせておきたいことがあります。

パラリンピックが障害者を差別するイベントであることを見抜くのはそう難しいことではないのに、パラリンピックを称賛する障害当事者や福祉関係者が存在するのは全く嘆かわしいことです。パラリンピックは健常者の大会であるオリンピックとは隔離されたイベントです。東京オリンピックが閉会し、しばらく経ってパラリンピックはあらためて開会されました。つまり、別々のイベントなのです。障害者競技ではなく女子競技が同様の扱いを受けたとしたらどうでしょう。古代オリンピックの伝統にならいオリンピック本体は男子のみとし、その閉会式が終わってから「女子リンピック」が実施されたとしたら、、かなりの人が「女性差別」であると気づくでしょう。パラリンピックは障害者差別のための祭典であるにもかかわらず、多くの人は24時間テレビ同様の感動ポルノにまんまと乗せられてしまったのです。

多くの施設や病院に障害者は隔離されています。それを当然と思ったままなのもパラリンピックを容認するのと同じ考えです。

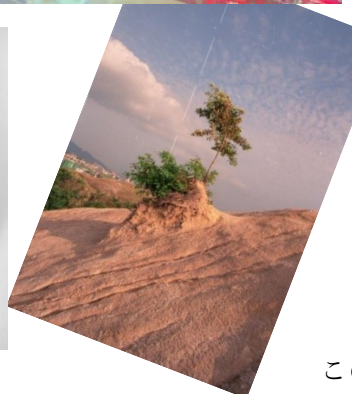
顔を合わせるのは精神障害者仲間ばかりという不自然な環境のどんぐり工房を利用せざるを得ないのが我々の実情です。

本当の意味での「共生」は、パラリンピックにはありません。最低限、パラ競技をオリンピック本体の中に吸収しパラリンピックを廃止することが必要でしょう。

パラ・アスリートの活躍に感動している場合ではありません。

2021/10/11

ギャラリー 大熊



この画像はすべて大熊さんの作品です



「方向音痴」

十歳になったばかりの私には正確に読み取ることの出来ない名字や屋号がいくつもあった。時代劇に出てくる商人の大福帳のような横長の順路帳は、手垢と誰かのメモでひどく汚れていたが、私はそのわずかな余白に曲がり角の目印などを小さく書き足していった。

生まれて初めての労働(そう、アルバイトという軽い呼び方をするほどの余裕はなかった)、それは当時の貧しい家庭の子どもたちが家計を助けるためにやっていた新聞配達だった。

順路帳とは言っても、道順を書いてある訳ではなく、購読者の姓名や屋号が書いてあるザラ紙を綴じ合わせたもので、さらに分かりにくいことには、順路帳作成後に購読を始めたお客の名前は後のページに書き足すようになっていたので、順路帳と配達順はところどころで入れ替わっていた。

私に道順を教えるため同行してくれた新聞販売店のTは慣れているらしく、順路帳さえあればその販売店の管轄地域はどこでも配達出来ると自慢気だった。

朝刊と夕刊の二度、私はTの自転車のあとを従って走ったが、翌日から一人で百五十軒近い家の道順を回る自信はなかった。

その夜、不安で眠れぬまま夜中に順路帳を手にも一人で同じ道をたどった。どうしても思い出せない家が数軒あった。十二月一日の寒い夜、私は汗まみれになりながら入り組んだ路地を探し歩いた。街灯もなく、表札のない家が多い時代であった。放し飼いの犬に追われ、悪臭のするゴミ箱の陰にしゃがみこんで私はべそをかいていた。

〈俺は道順を覚えるのは苦手なんだ〉 異常とも思える私の「方向音痴」はこのときの落胆を機に育ち始め、いまでは私のなかにどっしりと根を下ろし、揺るぎない地位を占めている。

他人に道順を教えるとき、定規を使い、距離感や道幅にまで気を遣うようになった。

我が家には、家とは不釣り合いな大きな表札があり、以前、小型の柴犬を飼っていたときには、その身体に似合わない太い鎖で繋いでいた。

「希望」会員 小林征司

ご寄付 御礼

NPO 法人希望の活動に対し、「四街道プロバス」様よりご寄付を頂戴いたしました。大切に使用させていただきます。大変ありがとうございました